

そのひとことで…

秋田県 大湯小学校 5年 宮沢 美希

それは、とても暑い夏の日でした。その日はいつも以上に暑く、部活が始まる前から水筒の水を飲んでいました。すでに半分ほど飲んでしまい、(もっと多めに持ってくればよかったな) と思いました。

部活が始まったのですが、参加しない友だちがいます。話を聞くと、足が痛いと言っていました。その日は練習ができないようでした。でも、その友だちは声だけでも一生懸命に出して、部活のみんなといっしょに活動しようとしていました。そして、みんなにボールを渡したり、タイマーで時間を計ったりしていました。(きっと練習に参加したいだろうけど、みんなのためにがんばってくれている。みさちゃん、えらいな) と思っていました。

そうして練習をしているうちに、だんだん水筒の水が減ってきて、あっという間に少ししかなくなってしまいました。わたしは、暑くても、のどがかわいても、がまんしながら練習を続けていました。

練習時間はまだまだあるのに、水筒の中の水はほんのわずかです。(困ったなあ) と思っていると、何やらみんなが一カ所に集まっていきました。行ってみると、練習を教えに来てくださった親の会の方が、お茶を持ってきてくれたのです。

(よかったあ) と思って、お茶を飲もうとしました。すると、足を痛めていたみさちゃんが、コップにお茶を注いで、みんなに配ってくれました。わたしもみさちゃんにお茶をくんでもらいました。お茶のポットの周りにはたくさん人が集まっていたので、とても助かりました。

(やさしいな。わたしもこんなふうに行動できるようになりたいな) と思いました。

そのお茶は、ふつうのお茶よりもしょっぱい味がしました。熱中症対策にと、お茶に塩を入れて持ってきてくださったようでした。部員のみんなは、「うえ、なんか変な味がする」と言っていたけど、わたしは親の会の方の心遣いがとてもうれしくて、いつもよりおいしく感じました。

あと少しで部活が終わりそうだというとき、自分で持ってきた水筒の水も、ついに底をついてしまいました。すると、わたしのことを見ていたみさちゃんが、

「水なくなっちゃったの？わたしのあげようか？」

と言って、自分の水筒から水をわけてくれたのです。このひとことで、わたしのむねはポツと明るくなりました。わたしは、少しはずかしかったけれど、

「ありがとう。」

と言いました。

いつも部活が終わった後には疲れてぐったりしているのに、その日はいつもより心と体が軽くて、スキップしたくなるような気持ちで帰りました。

今度は、わたしの番です。「小さくてもいいから、相手の心が温かくなるような行動をしよう」と、心に決めました。